周縁を生きる牧会者―20世紀の牧会学教師たち

才　藤　千津子

はじめに

20世紀以降の牧会学研究の方向は，ここ数十年の間に大きく変化した。プロテスタント教会における牧会学は，大きく変化する社会状況との緊張感ある対話の中で，激しく変遷を遂げてきたといえる。現在の英語圏の牧会学者の大方は，20世紀後半の公民権運動，フェミニスト運動などを経験してきた人々であり，グローバリゼーションが急速に進展し競争が激化する世界において教会の指導者，牧会者として生きるための知恵を受け継ぐ人々である[1]。

1980年代，英語圏の牧会学の主流は，「治療的パラダイム」から「共同体コンテクスト・パラダイム」へと大きくパラダイム転換した[2]。その後，教会共同体と神学的伝統に根ざした牧会のあり方が改めて模索される一方で，女性差別，人種差別や貧困，ハラスメントなど社会正義に関わる様々な問題にどのように取り組むか，スピリチュアリティ（霊性）に対する一般の人々の関心の増大にどう応えるか，仏教やユダヤ教など他宗教の伝統や文化，特に東洋の宗教の霊性とどう対話してゆくか，世界同時に起こったコロナ危機や戦争の中で苦しんでいる人々にどう応えて行くかなど，現在社会に起こっている変化に応答することが求められてきた。牧会学者たちは，教会や人々の内面性，すなわち心理や霊性だけではなく，彼らが置かれた社会的・文化的な背景に鋭い注意を向けるようになった。

1　Robert C. Dykstra (ed.), *Images of Pastoral Care: Classic Readings*, St. Louis, Missouri: Chalice Press, 2005, p. 151.

2　チャールズ V. ガーキン（越川弘英訳）『牧会学入門』，日本キリスト教団出版局，2012，pp. 96-101.

もちろん，牧会学が歴史的に個人の精神的・感情的幸福や癒しに注目し，牧会を求める個人一人一人特有の声を考慮に入れるよう主張してきたことには大きな意義があるし，現在でもそのような視点は大切にされている。しかし，今日，多くの牧会学者は，20世紀における英語圏のパストラルケア運動が，その初期に個人の心理の分析や癒しに集中したことを省みて，それは結果として，苦しんでいる人の苦悩を構成する社会的・環境的要因を軽視することにつながり，それによって結果として苦悩の中にある人を孤立させることになったのではないかと考えているのである[3]。

しかし，以上のような大きな変化にもかかわらず，20世紀の牧会学をリードしてきた先人たちの間に共通して見られることがあるように思われる。それは，牧会学者としてのアイデンティティの「不安定さ」「脆弱さ」である。例えば，20世紀初頭，この分野を並外れた勇気と強い召命感を持って開拓したアントン・ボイセンは，その成人期のほとんどを精神科の患者として病院で過ごし，それゆえに，牧師になる道すらも閉ざされた人であった。また，現在，欧米の牧会学の最前線にいるフェミニスト/ウーマニストの女性神学者たちは，最近まで，教会や神学界でその存在が黙殺，排除され，それに抵抗してきた人たちである。彼らの生き方と思想には，共通して「孤独な追放者（lonely exile）[4]」のトーンがあるように感じるのは筆者だけだろうか。

アメリカ東部にあるプリンストン神学校の牧会神学教授であるロバート・C.・ディクストラ（Robert C. Dykstra）は，牧会学者として自らも同じように職業的アイデンティティの曖昧さに苦しんできたと告白する。彼は言う。

> 私たちのアイデンティティは，自分が何者かを常に知っているということにあるのではなく，自分が何をしているかが分かっていないことにある。私たちのアイデンティティは，イエス自身が告白したように，時に，喪失のなかに見出されるのである[5]（以下，才藤訳）。

3　Dykstra (ed.), *Images of Pastoral Care,* p. 152.
4　Ibid., p. 160.
5　Ibid., p. 6.

この小論では，ロバート・C.・ディクストラの編著書 *Images of Pastoral Care: Classic Readings*（2005）に描かれた現代の牧会者，牧会学者のアイデンティティについての省察をもとにしながら，特に彼がその本の中で取り上げた二人の牧会学者について考察する。この二人は，ともに牧会者であり，牧会学やパストラルケアの実践，宗教心理学を神学教育の現場で教える神学校教師であった。一人は，20世紀前半，この分野が大きく発展するきっかけを作り，のちに臨床牧会教育の父と呼ばれたアントン・ボイセン（Anton T. Boisen）であり，もう一人は，20世紀末から現在にかけてフェミニスト牧会神学のリーダーの一人であるブリタ・ジル＝オースターン（Brita L. Gill-Austern）である。彼らは，自ら一般社会との境界，社会の周縁部に生きる人間としての痛みを負い，そのことを見つめ，勇気を持って社会の周縁や境界に生きる人のケアと神学教育に携わってゆく人生を選んだのである。

第１章　境界を生きる牧会者～20世紀牧会学の教師たち

アメリカ東部にあるプリンストン神学校の牧会神学教授であるロバート・C.・ディクストラ（Robert C. Dykstra）は，彼の編著書 *Images of Pastoral Care: Classic Readings* の中で，20世紀の牧会学に貢献した19人の著作を紹介している。彼らは，現代人に求められる牧会や牧会者の働きを様々なイメージを用いて説明したが，時代とともに中心的なイメージは変遷していったとする。たとえば，1960年代に大変人気のあった「親切な羊飼い（the solicitous shepherd）」（スワード・ヒルトナー）のイメージは，1970年代には「傷ついた癒し人（wounded healer）」（ヘンリ・ナウエン）のイメージに移行した。さらに，1980年代には「賢い愚か者（wise fool）」（ドナルド・キャップス）に取って代わられ，1990年代から現代までは，「生きた人間のネットワーク（living human web）」（ボニー・ジーンマクレモア）など，さらに多くの代替的イメージが登場した[6]。

6　Dykstra (ed.), *Images of Pastoral Care,* p. 11.

ディクストラは，これらのイメージを描いた牧会者の著作を一冊にまとめることで，牧師や牧会者として働こうとしている人々が，自らの牧会スタイルを方向付けるメタファーを識別することができるだけでなく，ミニストリーにおいて自分に役に立つメタファーを発見する助けとなることを願うと述べる[7]。これらには，古くからキリスト教共同体においてパストラルケアの行為を導いてきた豊かな知恵と経験が，現代の言葉で表現されているのである。

この本において，ディクストラは，イメージやメタファーでしか表現できない部分がある牧会学という分野のアイデンティティのあいまいさと脆弱性を強調している。牧会学は，聖書学や組織神学など他の神学分野に比べ，神学的厳密性や論理的整合性に欠けるとして批判され，ともすれば神学の周縁部に置かれてきた。牧会学者は，彼らが影響を与える多くの牧師たちと同じで，しばしば，自分たちが何者であるか，一体何を成すべきかについてはっきりと確信が持てない[8]。彼らは次のように問う。「牧会学とはどんなものなのだろう？ケアやカウンセリングという牧師の職務とはどんなものなのだろう？」ディクストラによれば，これらの問いへの答えは次のようなものである。すなわち，牧会学と牧師の重要な職務は，周縁部に置かれた人々と共に生きることであり，踏み固められた道から外れ，ある時代と文化の中で虐げられ，忘れ去られた人々のところへ赴くことなのである[9]。

ディクストラは，教会と社会の「周縁部」「境界上」に置かれているという脆弱さや曖昧さ，断片的なアイデンティティは，牧会学の重荷であるとともに，その召命であり，恵みでもあることを強調する[10]。なぜならば，牧会学者と牧会者が注意を向けようとしてきた市井の人々の多くも，社会のパワー（力）の中心におらず，周縁部に置かれているか，あるいは痛みと苦しみの中にあって人々から忘れ去られようとしているからである。ディクストラは，牧会者としてのアイデンティティは，逆説的に，アイデンティティの危機的喪失と，牧会学は

7　Dykstra (ed.), *Images of Pastoral Care,* p. 8.
8　Ibid., p. 2.
9　Ibid., p. 2.
10　Ibid., p. 4.

十分な妥当性を欠くという認識の中に見出されると述べている[11]。

ディクストラの本に挙げられた著者たちは，聖書や教会史や神学をよく知っているに違いない。しかし，彼らはそれ以上のことも知っているのだ。すなわち，それは，苦悩し，絶望している人々に寄り添うための，風雨に耐えた実践的な感性のようなものである[12]。彼らは，「周縁部」「境界上」に置かれて苦悩し，暗闇の中を何度も通り抜けてきた人が持つ鋭い感性と，そのような人だけが見出す光を見出す眼差しを持っている。そして，これこそが，現代牧会学の先達者たちが育んできた貴重な財産の一つだと言えるのではないだろうか。

第２章　アントン・ボイセン～病いの経験から臨床牧会教育の創設へ

1800年代後半から1900年代初期，欧米では，科学としての心理学が大きく発展した。この時期は，心理学者ウイリアム・ジェイムズ（William James）の研究に代表されるように，宗教的回心や人間の宗教性の発達についての心理学的研究も進んだ時期でもある。それに啓発されるかのように，牧師の中にも，宗教心理学を学びそれを牧会や神学教育に生かそうとする人々が現れた。

アメリカ会衆派の牧師アントン・ボイセン（Anton T. Boisen, 1876-1965）は，この時期のもっとも有名な牧会心理学者の一人である。彼は，自らの精神的病いの体験をもとにして宗教経験と精神病との関係を研究し，『内的世界の探求』（*The Exploration of the Inner World*, 1936）という著書に著した。この本は彼の最初の精神科入院から15年後に書かれたものであり，当時，宗教心理学の教科書として広く読まれた[13]。

また，彼は，1925年マサチューセッツ州ウーチェスター州立病院（Worcester State Hospital）で，精医師リチャード・カボット（Richard Cabot）とともに「臨床牧会教育」（CPE, Clinical Pastoral Education）－初期には「臨床牧会訓練」（CPT, Clinical Pastoral Training）と呼ばれた－を創始した。それは，牧師になる勉強を

11　Dykstra (ed.), *Images of Pastoral Care,* p. 2.
12　Ibid., p. 10.
13　Ibid., p. 15.

進めている神学生たちが，精神的危機にある人の悲しみ，魂の苦悩などの重く複雑な人間の経験について，専門家の指導を受けながら患者から直接に学ぶという画期的な神学教育の方法であった[14]。

ボイセンは，「生きた人間の記録」（living human documents）は，聖書やキリスト教歴史文書と並んで重要な神学のリソースとされるべきであると訴えた。これ以後，牧師養成のための神学教育には，書物の学びだけではなく生きた人間を具体的に取り扱う臨床教育を取り入れるべきであるという意見が強まり，病む人，苦しみの中にある人から直接学ぶという神学教育法は全米に広まった。「生きた人間の記録，すなわち生きた人間へのパストラルケアの具体的経験は，聖書やキリスト教歴史諸文書とともに重要な神学のソースである。」「人間の魂についての臨床経験は神学の発展に寄与する重要な要素の一つである。」というボイセンの主張は，20世紀のプロテスタント教会のパストラルケアの特徴の一つを言い表す表現となったのである。そして，彼は，ボイセンは，20世紀初頭，この運動を強力に推し進めた人物として，「臨床牧会教育運動の父」と呼ばれるようになった[15]。

すでに述べたように，ボイセンは20代で精神的病いを発病し，その後，彼の言葉によると，断続的に５回もの大きな症状の発作を経験した。彼の自伝を読むと，病気の経験をする中で，息詰まるような幻覚の体験，苦しい自己崩壊の経験，世界が滅亡するという恐れが次々と彼を襲ったことがよくわかる[16]。彼は，教会の牧師になろうとしていたが，その道も閉ざされてしまった。そしてこのような闘病の苦しみの中で，ボイセンは，自分の病いは単に器質的，生物学的なものに由来するのではなく，霊的なものでもあると確信するようになった。彼は，宗教と医学の距離を縮めて精神的病いに苦しむ人々のために働け，という神からの召命を確信して心理学の勉強を始め，病院の臨床現場にキリス

14　チャールズ V. ガーキン『牧会学入門』pp. 81～85.

15　Edward E. Thornton, “Clinical Pastoral Education (CPE)”, in Rodney J. Hunter (ed.), *Dictionary of Pastoral Care and Counseling, Expanded Edition,* Nashville, TN: Abingdon Press, 2005, pp. 177-182.

16　例えば，Anton T. Boisen, *Out of the Depth: An Autobiographical Study of Mental Disorder and Religious Experience,* New York: Harper & Brothers, 1960, pp. 79-81.

ト教の牧会を導入する方法を探り始めた。

ボイセンは，友人への手紙の中で，自分の使命について以下のように述べている。

> 今朝，私の次の一歩について考えています。すでに心に思うことを書きましたが，もう少し言っておかねばならないことがあります。一つは，牧会に戻ることができないということがはっきりしていることです。ここでの入院が引き延ばされたことでその可能性がなくなりしました。（中略）残るのは，二つのコースです。調査の仕事をするか，以前にやったことのある他の仕事をやるかです。一つ目のものは後ろ向きで，私はいつも自分を失敗者だと感じます。もう一つのコースは，今私が関心をもっている自分の問題を取り上げることです。それは私にははっきりしたコースであると思えます。それは私の過去の経験に意味と統合性をもたせ，私が将来的に生きて働く目的となります。これは真に興味深く重要な問題です。最近理解されている，宗教と医療が出会うところです。種々の形において，狂気は医療というよりは宗教の問題です。このことを見損なったらどのような治療も効果的だとは言えません。しかし，教会はこの問題にまだ全く注意を払っていません[17]。（以下，才藤訳）

> 私の現在の目的は，ここ（精神病院）で直面している問題をとりあげることです。さまざまな形での精神障害は，医療的というより宗教的なものであると思います。そのように認識されない限り，うまく治療できないのです。私にはこの問題は重要なものです。それは，大勢の患者がいるばかりでなく，それに付与されている宗教的，心理学的，哲学的意味のためです。もし，私がこれについてたとえわずかな貢献でもなすことができれば，やり甲斐のあることだと思っています[18]。

17　Boisen, *Out of the Depth,* p. 110.

18　Ibid., p. 113.

このようなボイセンの言葉の背景には，彼の時代の精神病患者が置かれていた無理解と差別，過酷な環境があった。ボイセンによれば，彼が経験した1920年代のアメリカの精神科医療は以下のようなものであった。

> もちろん，私は，自分のケースについて長い間思いめぐらした。(そして）そのことについて，医者と話すチャンスを得ようとした。（しかし）このことは，ほとんどうまくいかなかった。その病院は（精神病の原因について）器質的見解を掲げていた。医者たちは，症状は未発見の器質的問題に根ざしていると考えており，患者と症状について話すなど考えてもいなかったからである。（医師と話すために）私が最も長く時間をもらったのは15分間だったが，その時，とても魅力的な若い医師は，性的衝動を取り扱う際には強くコントロールしすぎてはいけないと言った。彼は，自然がそうさせるのだと言ったのである。彼が私の問題の宗教的側面について理解も興味も持っていないことは，明らかだった[19]。

> 一番難しいことは，ここにいる私たちは事実上，死者の一人に数えられていることを理解することだ。法律的には，私たちは何の立場も地位もない。何の権利も持たない。私たちの言うことは何の価値ももたない。私たちの願い，感情，判断は，そうでないことの理由でしかない。この場所を描写しなくてはならないとしたら，ここは，私たちが泣いて，歯ぎしりする所だということである。光は失われ，愛する人たちからは切り離されている所である。一方，管理する側の人たちは，すべて，…患者が回復に向かうかもしれない症状を抑えるのに必死である[20]。

教会ではなく精神科の病院で宗教者として働くという決断は，この時からボイセンのただ一つの人生の目的となった。自分の病気の経験から，彼は，精神の病を患う人が経験する感情の衰弱の根底には霊的な要素があると確信した

19　Anton T. Boisen, *The Exploration of the Inner World: A Study of Mental Disorder and Religious Experience*, New York: N.Y., Harper & Brothers, 1936, p. 5.

20　Boisen, *Out of the Depth*, p. 113.

のである。彼は，その後，何度も入退院を繰り返しながら，残りの人生の大部分を精神科病院のチャプレンかつ患者として過ごした。これは，当時の教会や神学教育にとって全く未知の領域を開拓する人生を選択することであった。それはまた，常識という道を外れて，患者の内的生活のほとんど知られていない荒野（the little-known wilderness of the inner life）[21]を旅するという孤独な人生を選ぶことでもあったのである。

のちに自分の経験を振り返って，ボイセンは言う。

> 精神病院に患者として放り込まれることは，悲劇かもしれないし，あるいはチャンスかもしれない。私にとってはチャンスであった。（その経験は）私を夢中にさせる興味と深い意義のある新しい世界を教えてくれた。すなわちそれは，世界の全領域を，世界の最深部から宗教的経験の最高の高みに至るまでを，私に見せてくれた。また，これまでは厳しく隔てられてきた人間経験の二つの大切な領域の間にある確かな関係について，私に気づかせてくれた。そして，そのことは，私の人生の意味と目的を見つけるための課題を与えてくれたのである[22]。

1925年，ボイセンは，マサチューセッツ州ウーチェスター州立病院に招かれ，翌年，医師リチャード・キャボットらとともに，現在「臨床牧会教育」（CPE, Clinical Pastoral Education）と呼ばれている訓練を開始した。それは，精神的危機にある人間の重く複雑な経験（悲しみ，魂の苦悩など）について，指導を受けながら病む人々から直接学ぶという実践的訓練であった。彼は，患者との対話の記録を「生きた人間の記録」と呼び，神学生が苦悩する人間から直接学ぶことは，当時ほとんど書物に基づいて行われていた神学教育を豊かなものにすると信じたのである。

こうした彼の努力は，神学教育における「臨床牧会教育運動」として，アメリカだけではなく世界中の牧会者養成の現場に取り入れられていった。しかし，このように20世紀の神学教育に大きな影響を与えた人が，実は，生涯深刻な病

21　Boisen, *The Exploration of the Inner World*, p. 11.

22　Ibid., p. 1.

いに苦しみ続け，何度も人生に挫折した，一人の無力な牧会者であったということは，まことに意義深いことではないだろうか。また，このことが，ある意味で，20世紀の牧会学の方向に大きな影響を与えたとも言えるかもしれない。

この点について，ボイセンはこのように告白している。

> 私の仕事は，私自身の経験に照らして，常識の道から外れて，（人の）内面生活という未知の荒野を旅してきた他の人々の経験を検証することである。私は，可能なかぎり，この内面世界を全領域にわたって全体的にとらえ，内面的葛藤の不幸な解決策だけではなく，幸福な解決策をも検討しようと努めている。このことを遂行するに当たって，神学と精神医学が等しく関わっている霊的生活の法則を理解し，洞察することができるのは，一方を他方の光に照らして研究することによってのみであるという確信がますます深まってゆくのである[23]。

病院での臨床牧会教育が目指すものは，神学生が，苦しみや痛みの中にある人たちと直接出会う中で，様々な恐れや不安，失敗を経験しながら，牧会者として，人間として，自らのもろさ，弱さ，限界をしっかりと見つめることである。そして，それをグループ討議の中で神と仲間の前に告白し，お互いの弱さを受け入れることである。自分の弱さと脆さを見つめることで，初めて，社会の周縁部に生きざるを得ない人々への理解と共感が深まるのである。そして，その体験が，最終的には，パウロの言葉によれば，「わたしが人間として弱いときにこそ，キリストの恵みと力によって強い」という逆説的な「大きな気づき」「大きな喜び」へと向かう端緒となるのである。このことは，牧会者として立つことへと召された人々が，今も，神学教育の中で最初に学ばなければならない大切な事柄の一つである[24]。ボイセンは，20世紀パストラルケアの揺籃期に，自ら病を負うものとして，このことを明確に示してくれたのである。

23　Boisen, *The Exploration of the Inner World*, p. 11.

24　才藤千津子「『臨床牧会教育運動の父』アントン・ボイセン」西南学院大学神学部 2022 年度「道」より

第３章　ブリタ・ジル＝オースターン～抵抗するフェミニスト神学者

1960年代以降，アメリカ社会では，ベトナム戦争への反対運動や公民権運動など，社会や人々の価値観が大きく変化していった。その中で，牧師や教会も人々の道徳的・倫理的な疑問と要求に明確に答える預言者的役割を果たすことが要請された。黒人解放運動，女性解放運動の影響が教会に深く浸透するにつれて，社会的マイノリティとされる人々の中から，我々が住んでいる社会のコンテクストや社会構造がどれほど我々のものの見方や考え方を作り上げているかということの認識を求める声が大きくなった。牧会学においても，女性差別，貧困や人種差別などの社会的不正義と抑圧，不平等の問題への自覚と社会変革への取り組みの必要性が強く主張されるようになった[25]。

“Pedagogy Under the Influence of Feminism and Womanism”（フェミニズムとウーマニズムの影響を受けた教育論）という論文を発表したブリタ・ジル＝オースターン（Brita L. Gill-Austern）は，1980年代からアメリカ，ボストン近郊のアンドーヴァー・ニュートン神学大学院で心理学と牧会神学の教授を務めている。彼女は自分の牧師として，牧会学教師としての体験を振り返り，神学校での牧会学の教師としての働きは，神学教育の現場における牧会であると述べる[26]。まさに教育とは人間関係のわざである。彼女に影響を与えたアフリカ系アメリカ人であるウーマニストの社会活動家ベル・フックスは，教育における教師と学生の関係について次のように述べる。

> 教えるということは，すぐれてパフォーマティブな行為である。パフォーマティブであるということ（つまり，伝える内容や目的が，伝える行為そのものによって「体現」されているということ）がわたしたちの仕事を，

25　才藤千津子「20 世紀米国自由主義プロテスタント教会におけるパストラルケアの展開」『比較文化研究』第 87 号，2009，pp. 41-53.

26　Brita L. Gill-Austern, “Pedagogy Under the Influence of Feminism and Womanism,” in *Feminist and Womanist Pastoral Theology*, (eds.), Bonnie J. Miller-McClemore and Brita L. Gill-Austern, Nashville, TN: Abingdon Press, 1999, p. 150.

> 自在な転換，創発，即興的な変化の場たらしめ，それぞれの授業の，それぞれの持ち味を引き出す酵素となっているのである。教えるという行為の，このパフォーマティブな性格を大事にするならば，わたしたちは否応なしに「観衆」との関わり合い，演者と観衆の相互性ということを考慮の中におかないわけにはいかない[27]。

ジル＝オースターンは，牧会学を教える神学教師として，神学教育が単に知識の習得の場所となるだけではなく，そこで得た知識がミニストリーに従事する学生の生き方に根を下ろし，彼らの全人格的な成長と霊的な変容を促す場となることが大切だと主張する。教える業においては，知的な成長と同時に人格的変容をもたらすことができる教育法を開発することとともに，それを育む教師と学生との間の人間関係を育むことが必須なのである。彼女は，それに対して，フェミニスト/ウーマニスト神学の方法がどのように役立つかということに関心を持ってきた[28]。彼女は言う。

> フェミニスト/ウーマニストの教育論は，その方法と内容において，人生において生命を与え癒しを与える深いつながり，すなわち関係性に焦点を当てる。そのとき，教えることは，テクニックや方法というよりも，関係性の中に生きる方法となる。あらゆるフェミニスト教育論の中心は，私たちの教育実践が，生活のあらゆる領域において，いかに本物で，公正で，生命を与えるつながりを深めるか，また何がそのようなつながりを損ない，脅かすのかに注意を向けなければならないということである。私たちの教育はパストラルケアなのである[29]。（以下，才藤訳）

27　ベル・フックス（里見実・朴和美・堀田碧・吉原令子訳）『とびこえよ，その囲いを－自由の実践としてのフェミニズム教育』（新水社，2006 年）p. 14.

28　Gill-Austern, “Pedagogy Under the Influence of Feminism and Womanism,” p. 150.

29　Ibid.

以上のように，ジル＝オースターンは，フェミニストおよびウーマニストの立場から自分の神学教師としての働きを振り返り，いくつかのメタファーを使いながらそれを説明する。彼女の著作が教えてくれるのは，フェミニスト牧会神学者としての実践と，神学校や神学大学院で牧会学を教えるという働きとを統合するとはどういうことなのか，そのために牧会者/神学教師に必要な態度は，また教師と学生の人間関係はどういうものであるべきなのかということである。

フェミニスト牧会教師の自己理解：５つのメタファー

教師が教師としての自分自身をどのようなものとみなすかということは，教師が学生とどのように関わるか，そして教師が教育においては何が最も大切だと考えるかということを決定づける[30]。ジル＝オースターンは，自分がフェミニスト／ウーマニスト牧会学者であるということは何を意味するのかという問いに答えるために，５つのメタファーを用意する。それらは，助産師としての教師，ヴォイス・コーチ，物語の語り手・助け手，瞑想的アーティスト，そして寡黙な反逆者である。これら５つのメタファーは，フェミニストであり神学教師である彼女の，教師としてのアイデンティティと実践を形成するものである。そして，これらはまた，学生たちが牧会に携わるときに，彼らの自己理解に対して影響を与え，教育による変容を呼び起こすものである[31]。

助産師としての教師

ジル＝オースターンは，教師は学生の賜物を引き出す助産師であると述べる[32]。彼女は，ある助産師が「私は赤ん坊を産むのではなく，ただ（生まれてくる）赤ん坊を受け止めるだけだ」と言ったことを思い起こしながら，フェミニストの教師は，自分の考えを単に学生に伝えるだけではなく，学生の考えを受け止め，あるいはそれを生み出す手助けをすると述べる。助産師としての教

30　Gill-Austern, “Pedagogy Under the Influence of Feminism and Womanism,” p. 151.
31　Ibid.
32　Ibid., p. 152.

師は，教室に新しい命と真理をもたらすために，学生が本質的な問題に集中し，リラックスし集中して考えられるように努力する。そのために教師は，あらかじめ答えが決まっていないオープンな質問をし，学生と共にその答えを探るのである。

ヴォイス・コーチとしての教師

ある宗教に属するということは，人生の出来事についてのある特定の語り方を，あるいはまた自分が世界を理解する上での解釈上の枠組みを，取り入れることである。キリスト教の信仰を持つとき，その信仰者の生の物語は，キリスト教共同体の持つ「より大きな物語」と結び合わされる[33]。実践神学者ガーキンによれば，実践神学は，人々の様々な生の物語とキリスト者の共同体の根源的な物語との間の結びつきを確保することを課題とする。そして牧会とは，そのような根源的な物語に根ざす，生き生きとした信仰を表現する共同体を形作る働きである[34]。牧師は，礼拝，説教，教育，宣教，教会の管理運営などのすべてを通じて，教会員一人一人の人生における「個々人の物語」を「キリスト教の物語」へと結びつけるための解釈をする人であり，それによって教会員と共同体の歩みを導いてゆくのである[35]。

しかし，ジル＝オースターンによれば，牧師としての牧会学教師は，学生の解釈を助けるだけではなくそれ以上の働きを目指す。それを彼女は，学生が自らの「声」を生み出す「助産師」としての役割を果たすのだと表現する。助産師としての教師は，学生たちが自分自身の声を見出し，自分たちの物語を生み出すことを支援するのである[36]。

33　チャールズ V. ガーキン『牧会学入門』pp. 144-147.

34　同上，pp. 148-152.

35　同上，p. 381 訳者解説より

36　Gill-Austern, “Pedagogy Under the Influence of Feminism and Womanism,” pp. 153-154.

物語の語り手，助け手としての教師

ジル＝オースターンによれば，フェミニスト教育に重要なのは，学生たち，特に女性たちが，自分の存在，夢，希望の真実を語りつつ，自分の生の物語を書き直すよう手助けすることである。物語性は，フェミニスト教育の中心をなす。なぜならば，もし女性と男性にとっての新しい未来を予測させる新しい物語を描けなければ，自分たちを抑圧し束縛する古い物語に執着したままで，新しい方向を見出せずに終わるからである。自分と自分たちの共同体の新しい物語を描くことによって，私たちは，他者による抑圧に抵抗し，自分を新しく再創造することができるようになる[37]。

教師は，学生たちが自分の希望や夢を信頼し，物語という形で語る感覚を取り戻し，あるいは初めて自分の物語を発見することができるように手助けする。そのために，必要であれば，教師も，自分の信仰の物語を語ることを躊躇しないだろう。それは学生たちにとってのモデルとなるからである。また，教師は，教室において小説，詩，ビデオ，映画などの他人の声や物語を適切に使うことで，学生が自分自身の声や語りを力強いものにするためのモデルを示すこともできる[38]。

瞑想的なアーティストとしての教師

牧会学とパストラルケアの教育においては，指導のテクニックが初めにあるのでない。ジル＝オースターンによれば，教育は，目の前にいる学生に対して敬意を持って真摯に心を傾けること，彼らを深く注視することから始まる[39]。彼女は言う。

> 私たちの教育の対象（である学生たち）は，実に，聖なる神の聖なる存在（God’s holy of holies）であるから，私たちの尊敬に値するのみならず，彼等の人格の神秘 ― 私たちが関係を持つことはできるが，決して十分に把

37　Gill-Austern, “Pedagogy Under the Influence of Feminism and Womanism,” p. 155.
38　Ibid.
39　Ibid., p. 156.

握することも知ることもできない神秘 ― も，関係を持つに値するものである。まず，教室にいるのがどんな人間なのかを知ることが，教育におけるケアの第一歩である[40]。

瞑想的アーティストとしてのフェミニスト教師は，教室という物理的空間が学習環境に与える影響にも注意する。椅子と机はどのように並べるべきか？どこで授業を行うべきか？良い教育は，全人格が学習プロセスに招きいれられる美的で創造的環境を必要とする。教師は，教室が聖なる場所であることを学生に思い起こさせるために，瞑想や蝋燭の火を灯すなど儀礼をもって授業を始めることもあるし，同じく何らかの儀礼をもって授業を終わることもあるだろう[41]。

寡黙な反逆者としての教師

しかし，このような神学教育は，より古典的な教育学的アプローチや学問の基準に慣れた仲間の教師たちには，学問的に怪しいものだと思われがちである。伝統的なアプローチは，感情より理性，統合より分析，主観性より客観性，ソフトよりハード，空想的より経験的，感情移入より議論，心より頭脳，プロセスより成果に価値をおく傾向があるが，フェミニスト教育はまさにそれの反対だからである。

よって，フェミニスト牧会神学者は，望むと望まざるにかかわらず，一種のアウトロウとみなされてしまう危険がある[42]。実際，「女性牧会神学者は二重に疎外される恐れを抱いている[43]」とジル＝オースターンは書いている。「同僚からは，『ハードな』（古典的な）学問分野ではなく，『ソフトな』 分野にいると見られ」，「非伝統的な教育方法の使用は，同僚から真面目に受け止められない」，「たとえ，学生たちが，私たちが提供するものに飢えてフェミニストのクラス

40　Gill-Austern, “Pedagogy Under the Influence of Feminism and Womanism,” p. 156.
41　Ibid., p. 157.
42　Dykstra (ed.), *Images of Pastoral Care,* p. 160.
43　Ibid., p. 157.

に大挙してやって来たとしても。」[44]

彼女は言う。たいていの場合，フェミニストであることは，あるグループの周縁部に生きるという生き方を選択することである。この場所は緊張感に満ちた創造的な空間であるが，時には淋しい場所，不快な場所でもある。自分の信念に従うことは必然的に社会規範から逸脱することになると気づく時，彼女たちは自らにこう問いかける。「私はここで何をしているのだろう？」「これを教えている私は誰だろう？」「誰かが私の匂いを嗅ぎつけて本当のことを見つけだすだろうか ― 私って本物（の学者）ではないのかも？」[45]

以下，ジル＝オースターンの言葉である。

> 女性の牧会学者たちの多くは，プライベートで話す時，自分は恐れを抱いていると言う。それは，アカデミアの規則や法則が異なる教育ビジョンによって分断されている世界では，自分は反逆者なのではないかという恐れである。アカデミアの標準によれば，私たちは少し「逸脱」しているのではないかというひそやかな恐れなのだ[46]。

ジル＝オースターンによれば，教師が周縁に生きることは，それによって教育に独自の視点を提供することでもある。それゆえに彼女は，ある特定の場所に完全に所属しないということは，自分たちの仕事にとって不可欠なことなのかもしれないと告白する。そして，この点において，アメリカにおける歴史的人種差別に加えて女性差別とも闘ってきたアフリカ系アメリカ人のウーマニストたちから大切なことを学んだと述べる[47]。

彼女は言う。アフリカ系アメリカ人女性の多くは，白人文化の中に組み込まれながらもそれに完全に属することができない「内部にいるアウトサイダー（an outsider-within）」としてのスタンスが何を意味するかを良く知っている。

44　Gill-Austern, “Pedagogy Under the Influence of Feminism and Womanism,” p. 157.
45　Ibid., p. 158.
46　Ibid., p. 157.
47　Ibid., p. 159.

ウーマニストの小説家アリス・ウオーカー（Alice Walker）は，この「内部にいるアウトサイダー」の経験が自分の思考にどれほど大きな影響を与えたかを，よく描写している。「私は，この時期，初めて，孤独で淋しい場所，追放された者の場所から人や物事を見つめ，人間関係に真に気づくようになったと感じている。」[48]

この言葉を受け，ジル＝オースターンは，ウーマニストたちはフェミニストの立場に立つ教育にとって欠くことができない視点を提供してくれていると言う。彼女は言う。

> 私たちの多くは，葛藤し，包囲され，苛立ち，疲れ果て，しばしば孤独を感じるが，同時に，チャレンジを受け，元気づけられる。私たちは，たとえ周縁部に住んでいても，こここそがまさしく自分たちのいるべき場所だという確信を抱いているのである[49]。

４　終わりに～牧会学を教える教師 ― 神のめぐみに生きる孤独な反逆者

本稿で取り上げた二人の神学者は，牧会学が本質的にもっている周縁性や不安定さ[50]と真摯に向き合い，現代の神学教育に生かそうと苦闘した開拓者たちである。ボイセンは，20世紀アメリカにおけるパストラルケアの興隆の始まりにあたって，社会から疎外された病院の中での厳しい試練を通して牧会とは何かを訴え，ジル＝オースターンは，20世紀の終わりから今日にかけて，アカデミーの端や町の周縁に置かれたフェミニスト牧会神学者の不本意な抵抗について語る。この二人は20世紀の始めと終わりに生きた牧会学者であり牧会学教師であるが，彼らには共通して孤独な流浪者としての自覚がある。ディクストラは言う。

48　Alice Walker, *In Search of Our Mother's Gardens: Womanist Prose*, New York, N.Y.: Harcourt Brace Jovanovich, Harvest/HBJ, 1983, p. 244.

49　Gill-Austern, “Pedagogy Under the Influence of Feminism and Womanism,” p. 159.

50　Dykstra (ed.), *Images of Pastoral Care*, p. 2.

教会と社会の周縁部に置かれているという脆弱さや時には断片的なアイデンティティは，牧会学に割り当てられた特有な性質であり，その運命でもある[51]。

この視点に立てば，牧会者や牧会学者のアイデンティティの不安定さや脆弱性という性質は，否定的に見られるべきものではなく，むしろ敬意を払われ，大切にされるべきものだとすら言える。なぜならば，それらは，牧会者や牧会学者が何者であるか，何に対して，またどのような使命に対して召し出されているかということについて，本質的な問いを提起してくれるからである。

この小論で取り上げた人々にとって，神学教育に携わるということ，特に牧会を教えるということは，それ自体がまさに牧会である。同じように神学教育の現場でパストラルケアを教える立場にある筆者にとって，彼らの言葉は常にチャレンジングであるとともに，尽きない勇気を与えてくれるものである。

参考文献

Boisen, Anton T. *Out of the Depth: An Autobiographical Study of Mental Disorder and Religious Experience,* New York: Harper & Brothers, 1960.

――――――. *The Exploration of the Inner World: A Study of Mental Disorder and Religious Experience*, New York: N.Y., Harper & Brothers, 1936.

Dykstra, Robert C. (ed.), *Images of Pastoral Care: Classic Readings*, St. Louis, Missouri: Chalice Press, 2005.

ガーキン，チャールズ V.（越川弘英訳）『牧会学入門』日本キリスト教団出版局，2012.

Gill-Austern, Brita L. “Pedagogy Under the Influence of Feminism and Womanism,” in *Feminist and Womanist Pastoral Theology*, (eds.), Bonnie J. Miller-McClemore and Brita L. Gill-Austern, Nashville, TN: Abingdon Press, 1999.

フックス，ベル（里見実・朴和美・堀田碧・吉原令子訳）『とびこえよ，その囲いを－自由の実践としてのフェミニズム教育』新水社，2006.

才藤千津子「『臨床牧会教育運動の父』アントン・ボイセン」西南学院大学神学部　2022年度「道」より

才藤千津子「20世紀米国自由主義プロテスタント教会におけるパストラルケアの展開」『比較文化研究』第87号，2009，pp.41-53.

51　Dykstra (ed.), *Images of Pastoral Care*, p. 159.

Thornton, Edward E. “Clinical Pastoral Education (CPE)”, in Rodney J. Hunter (ed.), *Dictionary of Pastoral Care and Counseling, Expanded Edition,* Nashville, TN: Abingdon Press, 2005, pp.177-182.

Walker, Alice. *In Search of Our Mother's Gardens: Womanist Prose*, New York, N.Y.: Harcourt Brace Jovanovich, Harvest/HBJ, 1983.